

---

# 赤い糸

ゆうき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤い糸

### 【Nコード】

N02930

### 【作者名】

ゆうき

### 【あらすじ】

ごくごく平凡な日常を過ごしていた、悠。そんな悠の日常をぶっ壊したのは、金髪碧眼の外国語教師？平凡な女の子が、幸せを掴む恋の物語。

## 第一章 1 - 1

ねえ、

もしも、運命っていうものがあつて、

赤い糸なんてものがあつたら、

ぐちゃぐちゃに絡まっていたても、その糸がどんなに細くても構わな  
いから、

どうか私と貴方が、その糸で繋がっていますように。

赤い系 アカイト 第一章

これは、ちよつと天然で、でも優しい先生と、  
ごくごく普通の私の織りなす、

甘くて切ない、恋の物語。

「ねえ、新任来るんだってさー、」

新作のポッキー、抹茶ってなかなかおいしいなあ。  
そんな事を考えていたら、春香がそんな事を言い出した。

「新任？」

「そうそう、外国語の。吉井先生居なくなっちゃったから。」

「げっ、外国語、？」

思わず嫌な声が出る。だって、英語から始まって外国語は全滅だもん。

私の平均点を著しく下げている憎き教科。いや、授業中寝ちゃって  
る私も悪いんだけどさ…。

ともかく、そんな教科の新任の先生が来るとなつては、私もあまり  
いい気はしない。

「うあー、嫌すぎる。」

「ははっ、まあ確かに悠は外国語苦手だからね、」

「春香は良いなあ、まんべんなく適当に出来て、」

「努力のたまものよ、馬鹿。」

おでこをこつんとたたかれる。全く、すぐ手が出る女の子はモテな  
いぞ！

まあ、仕返しに一発たたき返してやって私も色気がないっちゃいな  
んだけど。

その後すぐにお菓子の話になっちゃって、結局どんな先生が来るの  
かって話にはならなかったけど。

あー。どんな先生が来るんだろう…。

「じゃあね、春香」

「またあしたー。」

そう言っ分かれ道で手を振って春香に挨拶をすれば、私は自分の家に帰宅するべく足を進めた。

私は今絶賛一人暮らし実行中だ。マンションに住んでいる。学校のある街の方は結構賑やかだけど、私の住んでいるマンションの近くは自然豊かで河とか流れていて、結構綺麗でいい感じ。

今日は何となく気が向いた方から川の方へ行ってみた。ごつごつとした歩きにくい岩場を越えると、私のお気に入り川に着いた。

でも、今日はそこに先客がいて。振りかえった、彼は

天使みたいに、きらきらと輝く金髪を持った外国人。





振り向いた彼と、目があった。  
とっても綺麗な、空の青

。

見た目は20代後半ぐらいだろうか、

顔は誰が見ても綺麗というぐらい整っている。

きょとんとしていてもその表情はどこか柔らかく、優しい雰囲気醸し出している。

体はすらつとしていて細い感じ。男臭さは感じさせず綺麗な印象を持たせる。

仕事帰りなのだろうか、ワイシャツにネクタイという姿だ。

で、ここで問題。

実は私、生まれてこのかた外国人さんと相性が悪いみたいです。

一年の時外国語担当だったレイ先生。43歳、男性。

につこり笑顔が素敵な方。だった。でもスパルタだった。

特に勉強のできない私はそのスパルタの標的になったようだった。  
毎日補習させられて放課後は毎日英語。私の英語嫌いに拍車がかかったのは言うまでもない。

二年生の時外国語担当だった吉井先生。吉井ミシエル先生。32歳、

女性。

日本人男性と結婚してこっちにやってきたらしいダイナマイトボーイーな美しいお姉さん。（おばさんという悪魔が降臨する）が、しかし、その正体はできの悪い生徒をいたぶるDS教師。標的にされたのは言うまでもない。でも私の外国語の平均点は上がらなかった。なんでだ。

（ちなみに、授業中寝てるお前が悪いんだろうとかいう突っ込み話の方向で。）

もう二人とも英語でしか喋らないもんだから、英語を聞くと軽く叫んじゃうというかなんというか…。

というわけで私、軽く外人恐怖症です。

さささ、と岩陰に隠れて様子をうかがう。

相手は、そんな私にキョトンとしたままで動かない。

そんな状況が何分続いただろうか。見つめあってるって言い方は良いけど全然雰囲気も無いしむしろ緊張感に満ちたものだ。

そんな状況が嫌になって私は恐る恐る岩陰から出てきて外国人さんに声を掛けた。

「あ、あの、…、外国人さん、ですよ、ね……？」

外国人さんはキョトンとした表情から、………につこりと笑みを浮かべて口を開いた。

「I am an Englishman . 又は、Britis  
h !」

.....、  
ああ、完璧に死亡フラグが立ちました。

この状況で私に残された選択肢は三つ。



一、叫ぶ。  
二、叫ぶ。  
三、叫ぶ。  
だ。

「きゃ ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ  
ああああ ああああ ! ! !」

思いつきり叫んで逃げ出そうと踵を返して走り出した。

やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばい  
やばいやばい！

ごめんよ私日本語しか喋れないんです道を聞かれてもきつところや  
ってダツシュで逃げてたと思う。

外人さんは目を丸く見開いて少し固まった後、あわててこっちに追  
いかけてきた。

ぎゃあああああああこっち来るな！

でもまあ、男女の足の速さなんて歴然としてて、プラス足場が悪か  
ったという事もありあっさりと手を掴まれました。

「いやあああああ、ちょ、離してください離してくださいごめん  
なさい日本語しか喋れませんのーいんぐりっしゅー！」

「ややっ、ごめんね、驚かせて、！ちゃんと日本語喋れるからね、  
僕……！」

……あ、日本語だ、。  
よかったあー。ちよっと安心。

「あー、す、すみません、私英語苦手で…、聞くと体が拒否反応起こして…！」

「うん、気にしないで。分かるよ、そういう子多いもんね。」

につこりと相手が笑った。あ、なんだこの人いい人だ…。  
ホッとして私も緊張の糸がほどける。

「すみませんでした、取り乱したりしちゃって。日本語、お上手です  
ね、びっくりするぐらい。」

にこりと笑みを浮かべて、そう言う。

日本語が喋れるなら逃げる理由も無いし。  
普通にいい人だし。

いやあ、喋ってみるものだなあ。

「いや、良いんだよ。びっくりするのは仕方ないんじゃないかな？  
ほら、僕典型的な外国人の容姿だから。」

確かに。びっくりさせやがってこの野郎とは思っても、

イケメンにそんな風に言われたら…、許すしかあるまい。

しかし、いわれてみれば確かに典型的な外国人の容姿だな。金髪碧  
眼。

金髪がふわふわしててお日様色…。あー…、これは……

「そうですね、とっても綺麗です。触ってみてもいいですか…？」

言わずにはいられない。だって、とっても綺麗なんだもん。

外人さんはキョトンとした表情を浮かべた後、にっこりと笑った。

「どうぞ、こんなのでよければ。」

そう言ってもらえれば、私は彼の髪にそつと手を伸ばす。

おおっ、近寄ってみると背が高い…、あ、ちよつと、屈んでくれた。

うわあ…、さらっさらだ…。シャンプー何使ってるんだ羨ましすぎるぞ。

そんな彼の髪をさらさらと梳くように撫でる。

なんだか、気持ちが良い。自然を笑みが浮かぶ。

「すっごく綺麗です…。サラサラしていて気持ちいい。」

「ありがとっ！ねえ、僕も撫でてみていい？」

緩く首をかしげる彼。

「え？はい。こんなのでよければどうぞ。」

にっこりと笑みを浮かべて返事をする。私の髪なんて安いものだし！まあ、確かに毎日ちゃんとお手入れしてるし腰まで伸ばしてるし、染めて足りはしないからな！。

黒髪は珍しいのだろう、彼は興味津々、といった感じに私の髪に手を伸ばす。

「すごい。綺麗だね。」

「貴方の方こそ、ふわふわしててお日様色で、とっても綺麗です。」

「ははっ、有難う。」

にっこりと笑みを浮かべられた。

そこまでは良かったんだ。

彼は何を思ったのだろうか、ちよいちよいと手招きをした。  
何だろうと少し顔を寄せたら、顔が近付いてきた。

え？

気づいたら、頬に柔らかい感触。

ポカンとしている間に相手の顔は離れて行つて。

「褒めてくれてありがとうね！t h a n k   y o u！」

笑顔の彼が、そんな事を言ったが、私の耳には入らない。

さっき前でのああこの人いい人だな、ばわーん、っていう気持ちが一瞬に冷めていく。

そして、私を占めていくのは怒り。

相手はそんな私に気づかずにここにこしている。

じろ、と相手を睨んでから、思いっきり相手のほっぺをばちーンと叩いてやった。

「私のほっぺはそんなに安くないんですよ馬鹿！」

そう言って走り去る。

いったい何なんだあの失礼な変態外人は！





「あっははははは、！それでなに？逃げて帰ってきたわけ？」

「わーらーいーごーとーじゃーなーいーっ」

昨日の事を話したら春香は大笑いした。

酷くない！？はっほっぺチューが奪われて悲しんでる親友に対して！  
この仕打ちはひどいんじゃない？

「いーじゃん別に。その人美形だったんでしょ？儲けもんだと思っ  
ておけばさあ。」

「そんなふうに思えないよ、！始めては好きな人がいいと思ってた  
のに…！」

おおよよ、と泣き真似をする。そんな私の頭を春香はべしつと叩く。  
相変わらずの暴力女だ。こんなこと本人に言ったらふるばっこ……、  
なんでこっち見て笑ってんの見透かされてそれで怖いんですけど！

「まあとりあえず、そんな不審者とはもう会う事は無いと思うから、  
安心なだけだね？」

そう、もうあの河原への近付かないし。  
あんな人と会うのはこれが最後だろう。

「どうかねえ。人の縁って妙なところがあるからねえ、どうなるかは誰にもわからないよ?」

「不吉なこと言わないでよ、!もうあったら次はぼこぼこにしてやるんだから…!」

全く、!あんな変態にはもう二度と会いたくない。

「はいはい。じゃあ私はホームルームさぼるから行くね。」

「あー、りょーかい。いつてら。」

教室から出ていくその背をひらひらと手を振りながら見送った。

あー、今日の一時間目ってなんだっけ…。

そんな事を考えてきたらばーん！と扉が開かれた。  
うおう！ビビった、あ…！なんだなんだ、…春香？

バタバタと駆け寄ってくる彼女の表情はなんていうかこう、ぼわーんとしていて、乙女っぽい、っていうの？

「ねえ聞いて聞いて！」

「な、なにになにに、どうしたの、！？」

ずずいと近寄ってくる春香の勢いに押されつつそう言った。

「この前外国語の先生が来るって言ったでしょう？」

「え？ああ、そんな話したようになかったような…。」

あんま覚えてないや。

「もう、ばかね！でね、さっき廊下で見かけたんだけど、すっごく格好良かったの！」

……………ああ、春香、君、面食いだっとな。

「それは良かったね、」

「金髪碧眼でさあ。あれは外国人だよきっと、！」

そりゃ外国語担当なら外国人だろうな。

「あ、ほら、来た！」

振り返った先には、  
昨日の彼。



神様、私なんか悪いことしましたっけ？



私は、変態が嫌いだ。

というか、無駄なスキンシップが嫌いだ。

女の子同士でべたべたするのはまだいい。だって同性だしね！

でも、男の人、特に年上に触られるのは嫌だ。

なんだか…、生理的に受け付けない。鳥肌が立つ。

というわけで私、この外人男、受け付けません。

「Ah yesterday's lovely girl!」

「だあああああああああ!!!英語でしゃべらないでええええええ!!!」

うああああ、!!!鳥肌立ってきちゃったじゃないかあああああ  
あ!

「ごめんごめん、英語は苦手なんだったね。」

昨日の事は何も気にしていないよ!という外人男のははっ、という  
爽やかな笑みにさえ殺気があふれてくる。

「乙女の純情踏みにじりやがってー!」

初ちゅ だったんだぞ!ほっぺだったけど!

「ちょっと、そんな話聞いてないわよ、いつの間に新任の教師とや  
ったのよ!」

「ちっがあああう!そんな意味じゃないってば!」

「あ、そうなの?詰まんない。」

うおおおおおおおおおい!詰まんないってなんだ!

「人の不幸話を喜劇に変えないでよ！」

「煩いわねー、やっと処女脱出かと思ったのに。」

「cute girlはシヨジヨなのかい？」

「ええ処女ですよ悪かったですねえ………って勝手に割り込んでくるな近寄るなあっち行けばかあああああ！」

もう、なんなの子の男！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0293o/>

---

赤い糸

2011年1月7日12時57分発行